




学 位 論 文 の 調 査 要 旨

専攻名 (又は推薦専攻名)	地域イノベーション学専攻	氏名	三橋 源一
学位論文題目	災害対応における組織間協働の歴史的考察 —鳥羽藩・津藩・岡山藩の比較—		
調査委員会	委員長 藤田達生  委員 西村訓弘  委員 水木千春  (※署名または記名押印)		
<p>調査結果の要旨</p> <p>三橋氏が全体の要約を約 30 分おこない、3 人の審査委員によって約 1 時間 20 分間の質疑応答が進められた。今回は、主に前回の審査で保留になった 3 点の課題について、クリアしているのかが、中心的な問題となった。</p> <p>三人の担当委員の意見を集約すると、下記ようになる。</p> <p>①前回の審査では、論文のテーマが内容にそぐわないとの指摘があった。今回もテーマが変わったが、事前に相談があったうえでの変更なので、前回とは違うことが確認された。内容が、新たな事例も加わって議論が広がったので、こちらでよいことになった。</p> <p>②地域イノベーション学研究科にふさわしい論文に仕上げていただきたい。日本史の論文としては、藤堂藩のケースのみでは普遍性に乏しい。このレベルの事例研究を、全国的な広がりの中かでしてほしい。その際に、戦略的に藩を選択しなければならない。</p> <p>この指摘に対しては、志摩鳥羽藩（譜代 3 万石）と備前岡山藩（外様 31 万石）を選択し、それぞれの事例から、テーマに迫っている。そのうえで、現代における組織間協働—時代が求める企業や研究者の新たな役割—についての提言がなされた。</p> <p>③あらかじめ結論めいた考えを設定して分析してしまうと、客観性を欠き、底の浅い内容になってしまう。虚心坦懐に史・資料と格闘して、そのなかからオリジナルな結論を得るようにするべきである。この課題に対しては、江戸時代のような不平等を前提とした上で、「義倉」や「講」に倣った「富の再配分システム」を構築するために、現代の「共同体」の構築を提唱した。</p> <p>検討の余地のある論点も存在したが、今後さらに研鑽を続けることを前提に、今回の審査においては、合格と判断した。</p>			